

『散文トリスタン物語』における「鉱物誌」 ないしその出典に関する一考察

——鉱物の介入と『物語』の企み——

佐佐木茂美*

「その手にはこの世で最良の騎士であるという意味をもって黄金の林檎一つがあった。そしていま一つ「権勢」の標は、かれの胸の中央にある大層素晴らしい石で、暗い闇の空模様のなか半日の騎行行程の先からも見ることの出来るほどにその石は素晴らしい光彩を放っていた。」

(...tenoit en sa main une pome d'or, en samblance et en senefiance qu'il ot esté tous li mieudres cevaliers du monde. Et encore i ot une autre riquece, qu'enmi son pis ot une pierre si merveilleuse que, quant il estoit bien obscur tans, adont le peüst on veoir de demie journee loing, tant merveilleusement reluisoit la pierre.) (§ 45, ll. 26-32)¹⁾

「石」を所持する者は「天上の騎士」と言われるガラッドである。

上記引用部を考究する本稿は直接には「国際アーサー王学会」総会（2002年7月、於英・バンガー大学）での研究発表『『散文トリスタン物語』におけるプリアモス王の城』（Château de Priam dans le Roman de Tristan en prose）をまず行い、プリアモスの創建の城を根城とし、ついにはアルチュール（アーサー）王（キリスト教圏を代表する王者）と対峙するに至るこのトロヤ最後の王の子孫たち、——紀元前1,200年からの2,000年にわたる過去が第一段階（挿話群 §§ 39～44 前半）となる——を取挙げた。ついでさらに拡大、§ 44の後半部分および§ 45を加えて発表対象とした（「日本フランス語フランス文学会」春季総会²⁾）。七つの挿話よりなるこの構造研究では、現存中世文学では類を見ぬこの主題、かつ「プリアモス王の城」の輻湊する筋書のために規定枚数には収めきれなかった最終挿話クライマックス部を今回の稿で扱う事になる。ガラッドの冒険の締め括りに位置し、その身につける「石」の意味を問う局限的考究——そのミクロな寸法は——巨視的なテキスト全体を問い糺し、解明の鍵となろう。さらには一つのオブジェの在、不在が文化を言い当てる事にもなるはずである。

「ガラッドの故に」、プリアモスの城の「崩壊」と「再興」

ブリタニア（ローグル王国）（Royaume de Logres）とトロヤの対立構造はそれまでのアルチュール王伝説の知らぬ側面である。プリアモス王からみて四代を下降したブルートス（Bru）を祖先とするローグル王の一族、両者を「同族」³⁾とする擬歴史的過去の融和要素を『散文トリスタン物語』（以降『散文』）は拒否したことになる。§§ 44～45はアルチュール没後、130年⁴⁾して出現するシャルルマーニュ（カール大帝）（742～814）を関わらせて、『物語』を逸脱する未来へと展望を開く。「シャルルと呼ばれる、ガリアの王」⁵⁾（li rois de Gaule qui Charles sera apelés）（§ 44, ll. 42-43）の系譜はアルチュールの率いる「円卓の騎士」の一、ガラッド（Galaad）に遡求する。「かかる王（シャルルマーニュ）はバン王の血筋よりくるものでその家系の良さ、武の道に関して何かを受け継ぐ者であろう」（ll. 50-52）。

この言葉の出所はアルチュールが耳にした夢中の「声」（vois）（l. 39）であった⁶⁾。「声」は未来を告げてシャルル王の「イギリス制覇」の完了を起点に、ガラッドの冒険（異教の根城の「崩壊」）を受け継ぐ、王による「再建」、その仕上げとしてのガラッド像の完成が問題となる箇所である。

この一群のエピソードで、ガラッドとその末裔とされるシャルルマーニュとの関係が非常に強調されていることが注目される。異教徒と化したトロヤ人の根城（§ 39, ll. 45-47）は、厳密には「塔」（§ 42, ll. 1-2）の「驚異」が展開される。そこに捕われたガラッドを含む三人の騎士および囚人の救出、異教徒の死と生存者の改宗（ll. 25-32）が集約的にかく呼ばれ、その時「塔」は真二つに割れる（ll. 11-12）⁷⁾。

§ 45で初めて「塔」の「崩壊」は「ガラッド救出」（delivrance de Galaad）（l. 12）のためと明言される。この箇所がかれを主人公としたエピソードと「ガリアの王」を連係させる地点となる。「われらが主が許したまわば、ガラッド故にそこに赴き⁸⁾、それを再興するであろう…」（ll. 12-14）「塔」に関する「奇跡」とシャルルマーニュによる城「再興」はともにガラッドに関わる。この箇所には地上の愛を完遂するトリスタン——『散文』の本来の主人公——は想起されることはない。

以上の「原典解釈」はセカンスの最終挿話でのシャルルマーニュ導入が、「石」と関わるガラッドの名が特権的に挙げられるまさにこのコンテクストに位置する事を確認して置きたい。トリスタンの死と喪に服す宮廷（§ 141）、さらに「円卓の騎士」たちの探索の果て、死者を数えるアルチュール（§ 142-143）よりなる『散文』の終章（§ 136-137）は、「聖杯」の神秘を見る事となるガラッドとその死では取り上げられることなく⁹⁾、その前に位置するカロリング朝の系譜を有機的に連係させるこの地点のガラッドおよびその「石」に関わって来る。

幻の「石」、「紅玉」と「石榴石」の位階

「石」がある事と、その表象の二層の解釈を迫る場面で問題箇所は次の章句である。

石)は素晴らしい光彩を放っていた。」(§ 45, ll. 28-32)

この「石」を特定するためにはまず「古代もの」¹⁰⁾、そしてクレチアン・ド・トロワの四作品に頻発する「宝石」の一、「紅玉」/エスカルブークル (escarboucle) が、——仏文学の最初期に現れる、時に神秘的な程にその光彩¹¹⁾が強調される事を——を視野に入れるべきではあろう。さらにこの語の邦訳をいかに選定するか、まず手順をファン・ワルトブルグの浩瀚な『語源辞典』を閲することから始めたい。まず carbo の指小辞 carbonis から来た、とし「プリニウス以降、ギリシャ語の *ανθραξ* (炭火) を言い換えたルビーを示す」¹²⁾とある。だがここにはギリシャ語源を挙げつつ、この「紅玉」特有の際立った「光彩」に触れられていないし、なぜ「ルビー」かにも言及はない。

ファン・ヴァルトブルグの言う、プリニウスの証言は複数の carbunculi を挙げ、anthracitis と言われる種が「炭火に似ている」、「火の色」と記載している¹³⁾。ギリシャ語源の言及あるのみで『散文』のこの石が「暗い闇の空模様」にあって、「半日の騎行行程」からもしっかりと眼にする事のできるとする「光」重視はどこにもない。

光はどこからくるか？ 多くの中世フランス語訳を生んだマルボード (Marbode) (1035~1123) の『鉱物誌』(*De lapidibus*)¹⁴⁾——616 の写本を数える¹⁵⁾と言う、極めて広範な読者を得ていた、と断言し得る——にはこの点の詳細がある。

「紅玉」はすべての燃ゆる宝石が中で卓越し、

至る所に炭火のごとく光線を投げる。

(...)

だがギリシャ語では「炭火」と言われる。

暗闇はその光を消すことは出来ない、

(...)

この石はリビアの穴居生活者の住まう地方に生まれ、

その種類は 12 種を数えると言われる。

Ardentes gemmas superat, carbunculus omnes,

Nam velut ignitus radios jacet undique carbo,

(...)

Sed graeca lingua lapis idem dicitur anthrax

Hujus nec tenebrae possunt extinguere lucem,

(...)

Nascitur in Libia Tragoditarum regione,

Et species ejus ter ternia, tresque feruntur.¹⁶⁾

この 12 種——なぜ 12 種類か、の説明も分類もない——を数えるとマルボード (ラテン語原典) は言うがその中で「炭火」色の石のイメージが膨らみ、「火」であり、「灯火」で同時にある、「穴居生活」の必需品、リビア起源と詳述される。

古代の博物学 (アリストテレス¹⁷⁾が果たして同じ石を取上げたものか?) にはない「鉱物

誌」固有の「光」の強調¹⁸⁾があって「散文第二アングロノルマン」と銘打たれたマルボードの訳は *Carbunculus Rubis* として、「紅玉」(エスカルブークル)と「紅玉」(ルビー)を同一視している¹⁹⁾。以下諸般の原典の読み比べから *carbunculus* は総称であり、ルビーはその「華」と言う事になる。

escarboucle の語は「石榴石」として現代フランス語にも残るものを含み、現在の「宝石学」(*gemmologie*) は「準宝石」(*pierre semi-précieuse*) のランクに下げている²⁰⁾。中世は「宝石の中の宝石」、同一色彩の赤の「ルビー」と一括りとし、同じ「宝石」と認識していた、とみられる²¹⁾ (分類の誤差、ないし格差が実体を掴み難くし、かつ邦語への翻訳を困難にしている)。ガラッドの「石」を以降、本稿では「紅玉」/ルビーとして読み進めていきたい。

ガラッドの「紅玉」の表す意味は何か? 『散文』はこの「石」の「モノ」としての特徴を、闇に輝く性質として強調はする。だが、『鉱物誌』の列挙する「夜光性」の記載は無い。「暗い闇の空模様」とあり微妙な、「夜」と言わないための用意がなされている。その上「意味(効能)」は述べていない。まず「黄金の林檎」がガラッドの手にあり、——本稿冒頭部分参照——その記述を引き取って「いま一つの『権勢』の標は」とある。「黄金の林檎」と並べての「意味」を「紅玉」に与えようと意図されている、それは明らかである。

上掲マルボード訳『鉱物誌』(『散文翻案』)は「紅玉」(ルビー)に「権勢愛」(*ami de seignurage*)²²⁾ という意味を付与している。『エレックとエニード』はこの点にあって、この二語 *rubi*, *escharboucle* の同時使用と、言い当てられた意味の両面から注目すべきテキストである。ヒロインの外套を飾る宝石について、「他の側には紅玉/ルビーがあって/燃える紅石にもまして輝いていた」(vv. 1593-1594)²³⁾ 「紅玉」は「王冠」の意味を補充するものとなっている。しかもその数四個とある²⁴⁾。数詞の「拡大辞」、その象徴性に照らせば²⁵⁾ 世界制覇である。宝石による光はクレティアン全作品に関わる特徴であり——時代的特徴である以上に——アルチュール自身が眩暈を憶えるほどの、とテキストの言う照明を与えつつ、聴衆の注意を収斂し、そこに別次元の意味、象徴性を提示する。通常の「石榴石」、月や、星や、夜光との比喻、比較を超えて、「紅玉」さらに珠玉のルビーおよびその数四個、そして「紅玉」の「陽光」との意味を孕んだ「接近」点に「聖杯」の光彩が位置する²⁶⁾。『鉱物誌』を出て、「物語」世界は現実を改変し、豊穡な「驚異」の野を奔放に駆ける。

『散文』のガラッドは「騎士」像であり、

ガラッドの名誉のために作られた騎士

(le chevalier qui ot esté fais en l'oneur de Galaad) (§ 45, ll. 22-23)

「黄金の林檎」²⁷⁾と「石」の等価がまず明記されている。『散文』の V. I-II が 1240 年以降として、それより数年から 10 年は以前の著作年代をもつ、圧倒的な影響力をもった『薔薇の物語』前編の「権勢」(*Richece*)²⁸⁾の擬人化(王妃ないし女王²⁹⁾)がただちに想起される。『鉱物誌』の *seignurage* は採用されず、*Richece* とある。頭上の王冠の中央に嵌め込まれた「紅玉」(*escharboucle*)³⁰⁾ (v. 1100) は「一里先」(v. 1104) までも見えると、距離の指定——ヴァリエント³¹⁾を閲みしても——の明記がある。

「紅玉」は、世俗の「権勢」と明記された記述をそのまま受けいれても辻褄は合う。しかしなぜ王冠にガラッドは「紅玉」をもってはいないのか？

兜から「胸中央」へ、アロンの紅玉／ルビー

ガラッドの「石」＝「権勢」という解釈は予定されている。だがその「安心感」を阻むものは、「紅玉」の置かれた位置である。『散文』は言う。

かれの胸の中央には (enmi son piz) (§ 45, ll. 29-30)

ガラッド像が「王冠」³²⁾も載せず、その「紅玉」が「胸」にある、という明示にいかなる作者の意図が読めるか？ ラテン語「心」(cor)の訳語としての cuer、またフランス語内部での cuer/cor³³⁾(心と体)など叙情詩面で多用された語彙・対語は援用されず、広い範囲の内臓(心臓、肺、ときに胃)を被う胸郭前方 piz が使われている事が注目される。『散文』でガラッドの「紅玉」の置かれた直前には次の行が読まれる。

ガラッドが手にしたとき同じ盾と兜を造らしめた。(ll. 17-18)

つまり「兜」を一旦は挙げつつそれを意識的に避けている点が眼を惹く。騎士は『ローランの歌』以降「兜」にこの特権的な宝石を象眼させていた。これには夥しい証左³⁴⁾があり、王冠と並んで兜(とくに「鼻当て」³⁵⁾部分)が「紅玉」に当てられた位置である。騎士ガラッドで頭上でも兜でもない位置に填められたこの「宝石」はなにを意味するか？ 王権や世俗の諸権力とは無縁ではないか？

レンヌの司教であったがマルボードはむしろ異教的かつ古典古代的な「紅玉」(エスカルブークル)の定義を主として採る。キリスト教的「比喩的語法」(tropologique)によって展開する「キリスト教的韻文鉱物誌」³⁶⁾(*Lapidaire Chrétien en vers*)によれば、「効能」(vertus)が神によって三つの場所に置かれているとまず断言する。「石と草木と言葉に」(em pierres / Et en herbes et en paroles) (p. 239. vv. 52-53)。なかでも「宝石」が神は愛でられ、その名称すらその意図にある、とこの「鉱物誌」冒頭で、さらに本書を情報源とする「フィリップ王の鉱物誌」³⁷⁾でも (Ed. Pannier, p. 292, ll. 3-4) かく宣言する。宝石は「創造」(cria)され、「効能」(vertus)、「美しさ」(graces)、「名称」(lor nons) (vv. 19, 21, 22 et 23) も、人間の抑制を超えたところにある、と。

ガラッドの「石」は厳密にはモーセの三歳上の兄で、ユダヤ教初代大祭司アロンの緋の祭服、そのうえに置かれた胸元の宝石(「出エジプト記」、28-29、39、「レヴィ記」、8-10、「民数記」、16-18)を指差してはいないか？ 宝石総数 12 は (12 の民の名が刻まれていると言う) これはマルボードの「紅玉」の種数にに通じる³⁸⁾。「キリスト教韻文鉱物誌」は「衣」(vestment) (v. 75) と「旧約」(viés testament) (v. 76) の脚韻を踏ませて大要を紹介する。

アロンの胸元に黄金の鎖で

下がった (Au chaînes d'or fu pendus
 Au col Aaron) (p. 240, vv. 91-92)

「ユダヤ人の最初の祭司アロンの胸の上に、われらの主の命じたもうたように12の石が置かれたかの祭服が下げられた。」(Icele parement ou les douze pierres furent mises par le commandement nostre signor *sur le piz Aaron* fu penduz, qui li premiers prestres des juïs fu) (p. 292, ll. 14-17)³⁹⁾. この用例では col ではなく piz が使われている事が注目される。

「さて聴かれよ、神が愛でられし石をいかに呼ばれるか」(p. 241, vv. 97-98)、とあって「神の造られし高価な宝石、その数12」(douze de ses pierres chieres (v. 79)、ついで列挙がなされる。「四列」ごとに「三種の石」(v. 89) が付けられた。二列目の配列で問題となるのが「ルビー」、「紅玉」(エスカルブークル) である。rubys, escharboucles の等価がここでもまず確認され、その美しさでは他のすべての石を凌ぐとある。

はじめに人言うようその美しさでは
 すべての石を凌ぐルビーが填められた
 まさに紅玉の名をもっていた
 (Premierement i fu assis
 Li rubys qui toutes par conte
 Les pieres de biauté sormonte:
 Escharboucles eut non sans doute; (vv. 106-109)⁴⁰⁾

先に検証した「紅玉」、「石榴石」の特徴が反復され、ここでもなお「権勢」との密接な関係が詳述される。「先に学んだように／ルビーには世継から世継ぎへ、／先祖よりの主権 (signorie) がある。／それにより、ルビーはまさに主たる12の石の自然の石の／持てる力と効能、」(p. 246, vv. 276-286)

同テキストは宝石の「意味」(senefiance) を取上げてなお「ルビー」を問題とする。「アロンの胸元にはルビーが／宝石の中の宝石と呼ばれる／貴てなる、愛でらるるルビーが／置かれていた、((...) fu mis /*Au col Aaron li rubys,* / Li sires des pierres clamez, / *Li prisiés rubys*, li amez,) (p. 264, vv. 878-880)

escharboucles——「紅玉」にしる、「石榴石」にしる、——に注目した先行の研究にはこのヘブライ的側面は取り上げられていない。「紅玉」中の筆頭「ルビー」に託されたこの別次元のメッセージに注目する時、テキスト解釈の修正が求められてこよう。「物語」のジャンルでの「光」と「光彩」があらゆる「美」を集約する、「月光」と「星辰」の光輝を凌駕するこの宝石は、本稿では「日輪」をも超えるものとなるからである。「キリスト教韻文鉱物誌」によると「ルビー」は「苦しむものより苦しみを除き」(v. 882)、「かかる効能により／日夜あらゆる宝石を照らし出す。／いかなる石もルビーに比す事は出来ない。」(p. 265, vv. 883-885)

との明言があるからである。さらに「アロンの胸」の「ルビー」はキリスト自身を表彰するとの断言が読まれる。

モーセは その書で記している。
 それ（ルビー）はイエス・キリストを表し
 この世を歩むために来り、
 その暗き民に光を与えんためであった。
 かれは暗夜を照らし給うた
 この世を歩まれる時。
 (Moyses en son livre escrist
 Qu'il senefia a Jhesu Crist
 Qui vint en terre cheminer,
 Son obscur peuple enluminer ;
 Lor tenebres enlumina
 Quant il en terre chemina.) (vv. 889-894)⁴¹⁾

「陽光」を凌ぐ光源、キリストが大祭司アロン——かれそのものがキリストのトロポロギア——の胸元より輝き出ずる「ルビー」、の読みが確認される。

アロンのルビーはユダヤ教からキリスト教へ、現今の（大）司教の「佩用の十字架」に繋がる重要な表象となる。同じテキストで20行先に「ルビー」と「アロンの胸」とがさらに確認される。「石」を所持する者、ガラッド＝キリスト⁴²⁾の同一化は『散文』の『聖杯の探索』⁴³⁾組入れの意図がこのクライマックス部で明確に映し出されてくるということではないか？『聖杯の探索』の結びにガラッドを前に立ち現れるヨセフェ、「キリスト教徒の最初の司教」(li premiers evesques des crestiens) (p. 268, l. 22) は自分（アリマタヤのヨセフの息子）とガラッドとの間に相似を指摘する (p. 278, ll. 22-24)。ついで『散文』が「ユダヤ人の最初の司祭」アロンをガラッドの予表としてここに提示した時、その subtext としてのヨセフェを予表する、と読まれる。

本テキストでシャルルマーニュの主題に結集する「叙事詩」が「物語」（アルチュールの主題）に内部介入していくという特異性は単なる副次的読みである。大帝のイギリス制覇——当然のフィクション⁴⁴⁾——のジャンル間のブレや交差ではあり得ない重大な精神史、時代思想を示すと読まれよう。

まして二つの主権の単純な拮抗でこれはありえない。本稿のガラッドの「胸中央」の「石」⁴⁵⁾の追究により、光の彼方に現出するのはほぼ汎ヨーロッパ的——フランス語文化圏（仏、英、独、伊のおよそ輪郭に入る地域）、ムーア人の統一下のイベリア半島——ヴィジョンである。『ローランの歌』をもって大帝が「神に選ばれし者」となり Militia Christi を歩んでこのかた、『散文』がガラッドを大帝の系譜を遡求した所に置いた意味を解明するよすががここにある。

ただひとり「聖杯」を見る事を許された騎士ガラッドの額に「ルビー」が置かれずに、

「旧約」の「大祭司」としてその「胸」を飾ってそれはキリストを予表し、重なる。その時、創造者の手に選ばれてある特権的な「石」は、「ランスロ＝聖杯」群にヨーロッパの擬歴史2300年にエピローグを付加するものではないか？ かつて惨然と輝いていた「ガラッドの石」が俗の掌に握られ、隠蔽されてきて、この時をしも「旧約」と「新約」を通底する解きほどこれた読みに平行して、ガラッドを介して「物語」の新鮮な読み⁴⁶⁾がここに提示されたことになる。

NOTES:

- 1) Ed. par L. Harf-Lancner, tome IX, Genève, 1997, § 45, p. 137.
- 2) 2003年6月、於獨協大学。本稿は同学会誌に掲載予定（印刷中、本稿注27）参照。
- 3) Geoffroy de Monmouth, "De Historia Regum Britanniae", in *La Légende Arthurienne*, éd. par E. Faral, tome II, Paris, 1969.
- 4) *Le Roman de Tristan en prose*, éd. par M. Léonard et F. Mora, tome IV, Paris, 2003, § 331, p. 311, l. 36.
- 5) Ed. cit. de Harf-Lancner, tome IX.
- 6) 書き取られ、カマロ（Kamaaloth）の「主要な教会」の所蔵するところとなる。アルチュール王の「夢」＝テキストの機能については他で取り上げる予定。
- 7) 「塔の驚異」（§ 43, ll. 27, 39）におけるガラッドの中心的役割と、神の介入、「驚異」と「奇跡」（miracle, miracles）（§ 43, l. 42 et § 44, l. 23）の併用および「驚異」（§ 41, l. 24, § 43, ll. 9, 27, 39 et 41）の頻度を強調するに留める。
- 8) 第七巻に同じく「プリアモスの城」の冒険に関わるトリスタンほか二名の騎士挿話があり（Ed. par D. Queruel et M. Santucci, Genève, 1994, pp. 233-237, 120-122）、明らかな対比的構造を示す（その指摘は上掲2）論文参照）。城はpaganismeの砦としてのシンボル性を備えているがために類似挿話の増殖を誘発した、と考えられよう。
- 9) 『聖杯の探索』はガラッドが「聖杯」を「見る」場面でクライマックスを迎える（*La Queste del Saint Graal*, éd. par A. Pauphilet, Paris, 1949, p. 277, ll. 28-33 et p. 278, ll. 1-2）。
- 10) つとに指摘した研究はE. Faral, *Recherches sur les sources latines des contes et romans courtois du Moyen Age*, Paris, 1967, p. 354.
- 11) フェラルの東方趣味や装飾としての扱いから、Jean Frappierはこの「宝石」の特質である「光彩」をとくに強調し、前者の取り上げなかった『ローランの歌』を援用している（"Le Thème de la Lumière de la *Chanson de Roland au Roman de la Rose*", in *Cahiers de l'Association Internationale des Etudes Françaises*, N. 20 (1968), pp. 101-124）。後続の研究は"Clarté : Essais sur la lumière, II," in *Pris-Ma*, tome XVII / 2 (2001) 誌上（例えばA. Labbé, "Une obscure clarté : La table d'or et l'escarboucle de Pierre le Cruel dans la *Chanson de Bertrand du Guesclin*"）、にいたるまでこの「光」の位相にある、とみなしえよう。
- 12) "bezeichnet seit Plinius den rubin in wieder gabe des gr." (W. von Wartburg, *Französisches Etymologisches Wörterbuch*, Band II, Basel, 1971, p. 361).
- 13) Pliny, *Natural History*, ed. by D. E. Eichholz, London-Cambridge, Massachusetts, 1962, Livre XXXVII, xxvi.
- 14) Ed. by John M. Riddle, Wiesbaden, 1977.
- 15) *Ibid.*, p. ix.
- 16) éd. cit. de Riddle, pp. 61-62.
- 17) Aristoteles, Pliny, etc. 「金に勝る琥珀」など古代的な「石」の考究はここでは割愛する。
- 18) 韻文の「鉞物誌」（ms. de Modèneのみ）を援用、「光」の強調を注視、『散文』の「石」を特定化した研究にC.-A. Van Coolput, *Aventures querant et le sens du monde. Aspects de la réception productive des premiers romans du Graal cycliques dans le Tristan en prose*, Leuven, 1986, pp. 184-185.
- 19) P. Studer and J. Evans (ed. by), *Anglo-Norman Lapidaries*, Paris, 1924, p. 139, I. 「ルビー / エスカルブール」（Rubi escharbuncle）の配列も他に見られる（B. N. f. fr. 14969: P. Meyer, "Les plus anciens lapidaires français", in *Romania*, tome 38 (1909), p. 67, xxx, v. 547）。
- 20) 「石榴石」をboucleの「変造語」とする見解もある。（E. Baumgartner et Ph. Ménard, *Dictionnaire étymologique et historique de la langue française*, Paris, 1996, escarboucle）。
- 21) 『テーベ物語』の「灯台」の「石」も同様に「石榴石」となろう（*Le Roman de Thèbes*, publ. par G. Raynaud de Lage, tome I, Paris, 1969, pp. 21-22, vv. 661-666）。『ローランの歌』には敵の船団に掲げられた

- 「角灯」と併置された「石榴石」「数多くの石榴石 (carbuncles) と灯火掲げたり。」(佐藤輝夫訳、筑摩書房、1986年参照)、p. 197; *La Chanson de Roland*, texte présenté, traduit et commenté par J. Dufournet, Paris, 1993, p. 264, v. 2633) があり、同じ語が次の例証では「紅玉」と邦訳されている事に注意。イスラームの神テルヴァガンの身につけた escarbuncle はその「神像からは紅玉をひき千切り」(Ibid., p. 262, v. 2589)。
- 22) P. Meyer, art. cité, p. 67, xxx, v. 547. seignurage は「領土権/主権、権勢」。cf. 注 28)
- 23) “et un rubi de l'autre part, plus cler qu'escharbocle qui art;” (*Erec et Enide*, publ. par M. Roques, Paris, 1973, p. 49, vv. 1593-1594). “escharboncles” (*Le Chevalier de la Charrette*, publ. par M. Roques, Paris, 1958, p. 45, v. 1471)。
- 24) *Erec*, éd. cit. de Roques, p. 206, vv. 6777-6789. 『クリジエス』では「四個の石榴石」(quatre escharboncle) をもってフェニスの類いない輝く美しさを比した (*Cligès*, publ. par A. Micha. Paris, 1957, p. 83, v. 2711)。『聖杯の物語』(*Le Roman de Perceval ou le Conte du Graal*, publ. par W. Roach, Genève-Paris, 1959, pp. 226-227) の「驚異の寝所」の天蓋部の柱のそれぞれには四個の「石榴石」(escharbocle) (v. 7703) が取り付けられ、「四個の蠟燭」(quatre chierge) (v. 7705) に比さる。
- 25) 拙稿、“Quatre, signe ou signal pour une lecture (remarques sur les scènes du Château du Roi Pècheur dans les Romans du Graal (1181-début 1200),” 『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』、第 32 号 (1986), pp. 85-103。
- 26) Chrétien de Troyes, *Le Roman de Perceval ou le Conte du Graal*, クレティアン・ド・トロワ、『聖杯の物語、またはペルスヴァルの物語』、佐佐木茂美、訳註、大学書林、昭和 58 年、p. 60。クレティアン・ド・トロワの直接/間接の pré-texte、ウエルズ段階で『聖杯の物語』に当たる『ペレデュール』には、いかなる(「聖杯」について) 素材、装飾、光彩の記述も無い。単なる「深皿」があるだけだ (Loth, p. 203)。クレティアンより数年後に、同一主題で三部を著したロベール・ド・ボロンは、八音綴一行に『高価にして大いなる器』(Nitze, v. 852)。『第一続編』は「純金の造りにて、あまたの高価なる宝がそこにとどめられて」(MSSL, vv. 7521-7523, MS A, vv. 7483-7485)。この『続編』は十三世紀、さらに膨張を続けるが、「あまたの宝石のはめこまれし聖杯」(MSS T, V, D, vv. 1405-1406, MSS E, M, Q, U, vv. 3853-3854)。しかし『続編』の写本はどれを取上げてもクレティアンが強調した「光」には一様に触れることはない。(拙稿、「記憶」の記号『堅琴』所収、13 号、1983 年、pp. 18-21) ウエルズ段階に「宝石も光もないとすると、それを導入したのはクレティアン (またはその直接の典拠 (v. 67) か?)」。
- 27) 「黄金の林檎」は黄金色のマルメロをベルシャ語で意味する (Marco Polo, *Le Devisement du monde*, éd. par Ph. Ménard, tome I, 2001, p. 210, 35, 9)。騎馬像が手にする場合通常ブロンズ、だが『散文』では至高の騎士像を仕上げていく「想像界」の出来事であり、「宝石」同様に珍重された黄金であるに違いない。黄金に関しては、M. Bloch, in *Annales d'Histoire Médiévale et Sociale*, tome V, 1933, pp. 259-271; *L'or au Moyen Age*, Aix-en-Provence, 1983 の研究発表論文集参照。
- 「林檎」、「果実」(lat. pomum) —— 種一つ (noyau)、ないしそれ以上 (pépins) ある果実——従って林檎、梨、桃、イチジク、ナツメヤシ、胡桃までふくむ総称であり、中世ラテン語では普通に「地球」、「王位のシンボル」を同時に指していた (*Lexicon Latinitatis Medii Aevi*, Turnholt, MCMLXXXVI, pomum)。なお樹木に関する以下の拙稿四篇参照①「人間は樹木のごとく…」、樹木の伝説・聖杯の伝説 (I)、明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・No 2 (1999)、pp. 144-173; ②「人間は樹木のごとく…」——「地上の楽園」への旅—— (IV)、同研究論集・No 3 (2001)、pp. 165-203; ③「物語内の庭園・その形象と表現——クレティアン・ド・トロワの表象をめぐる——」、同研究論集・No 6 (2003)、pp. 121-155。さらに『散文』におけるガラッドの掌中の「林檎/果実」に関しては次の拙稿に言及がある。④ *Bulletin de la Société Japonaise de Langue et de Littérature Françaises*, 日本フランス語フランス文学会誌 (印刷中) (上註 2) 参照。
- 28) Guillaume de Lorris, *Le Roman de la Rose*, présenté, trad. et commenté par J. Dufournet, Paris, 1999, p. 102, vv. 1053-1108 (ギョーム・ド・ロリス『薔薇の物語』、佐佐木茂美訳註、大学書林、昭和 63 年、pp. 75-77)。
- 29) それぞれ三本を編み込んだ二本にたばねた頭髪が踝までくる、これは王妃ないしそれに準ずる地位の女性の指標であった (E. R. Goddard, *Women's Costume in French Texts of the Eleventh and Twelfth Centuries*, Baltimore, 1927, p. 219)。
- 30) 対キリスト教群との戦に暴徒と化したイスラームの信徒により「引きちぎられ」た「紅玉」(『ローランの歌』——「かれ (イスラームの神の偶像) の紅玉」(sun escarbuncle) ——は(領)主権の attribut であつたはずなのだ (上掲註 21))。
- 31) Z 本 (B. N. f. fr. 25523) も H 本 (B. N. f. fr. 1573) も変わらず、B. N. f. fr. 12786 et 378 の二本も距離指定がある「半里遠くに」(demie liue loing)。

- 32) *La Queste...*, éd. cit. de Pauphilet, p. 277, l. 21.
- 33) この換喩とその対立は他の詩作品に関し(拙稿, “Nonchaloir et Amoureux-Prisonnier. Mutation de la vie de Charles d’Orléans,” in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, 日本フランス語フランス文学会, No 16 (1970), pp. 1-19); 拙書, 『シャルル・ドオルレアン詩研究』, フランス図書扱い, 昭和53年, 771頁(「文部省研究成果刊行費」による刊行), 97-107頁参照。
- 34) ①*Le Charroi de Nîmes*, éd. par J.-L. Perrier, Paris, 1982, l. 8, vv. 244-245; ②*La Chanson d’Aspremont*, éd. par L. Brandin, Paris, 1924, p. 146, vv. 10709-10711; ③*La Mort Aimeri de Narbonne*, edizione critica con note e glossario a cura di P. Rinoldi, Milano, 2000, p. 209, vv. 85-86; ④*ibid.*, p. 259, v. 975; ⑤*Chevalerie Ogier de Danemarque*, éditée par M. Eusebi, Milano-Varese, 1963, p. 114, vv. 1653-1655. *Trésor de la Langue Française*, tome 8, Paris, 1980, *escarboucle* は初出年代を Ca 1150 とし①を写本年代(13世紀中葉)によって挙げている(マックミラン本)。
- 35) 兜の中央部に「紅玉」(*escarboucle*)は置かれ「第三の眼」とされた(R. Viel, *Les Origines Symboliques du Blason suivi de l’Hermétisme dans l’Art héraldique*, Paris, 1992, p. 154; Th. Miguet, “L’Escarboucle, pierre de lumière”, in *Marche Romane*, tome XXIX (1979), p. 58).
- 36) “Lapidaire en vers” (Ed. cit. de Pannier, p. 239). 本稿ではより正確な「キリスト教的韻文鉱物誌」とする。
- 37) 本稿(上掲 p. 4) 参照。
- 38) そのオリジナル本の影響下に書かれたか(F. Hue, “Contribution à l’étude des lapidaires anonymes en prose française (fin du XIII^es.-fin du XV^es.)”, in *Ecole des Chartes, Position des thèses*, 1975, p. 116).
- 39) Ed. cit. de Pannier, p. 292.
- 40) *Ibid.*, p. 241.
- 41) *Ibid.*, p. 265.
- 42) ガラッドはキリスト神秘名の一(A. Pauphilet, *Etude sur la Queste du Saint Graal*, Paris, 1921, p. 136).
- 43) 中世フランス語の『散文トリスタン』には中世スペイン語およびポルトガル語の翻案がある。そのいずれも「胸中央」であり「石」とある。Cf. “en medio delos *pechos* una *piédra*” (*La Demanda del Sancto Grial*, Sevilla, 1535, fol. clvij (木版印刷。現存三冊のみ); “no meio do *peito* uma *pedra*” (*A Demanda do Santo Graal*, éd. par H. Megale, San Paulo, 1988, p. 388)
- 44) 「司教のごとき」(en semblance d’esveque) (*La Queste...*, éd. cit. de Pauphilet, p. 268, ll. 17-18 et 20-21) 姿で現れたと言う。
- 45) 『ローランの歌』は二箇所、大帝のイギリス制覇にふれる(Ed. cit. de Dufournet, p. 88, v. 372; p. 242, vv. 2331-2332)。ウィリアム征服王との重なりが指摘されている(p. 391, v. 372 et p. 416, vv. 2322-2333の註参照)。
- 46) 信者の「胸中央」——(大)司教佩用の十字架の定位置——に *Corpus Domini* (聖体) は「拝領」(ミサのハイライト)、「安置」される。『聖杯の探索』で「キリスト教徒の最初の司教」ヨセフはガラッドの前に現れ、*Mea Culpa* 「胸中央」を打ち(éd. cit. de Pauphilet, p. 277, l. 25)、かれよりガラッドは「聖体」を受け(*ibid.*, p. 278, l. 15-16)。ガラッドが「聖杯」を見るのはその間の出来事である。『散文』の極めて巧みな介入はここに「新約」の読み替えの大司教と「旧約」第一代大祭司とを一堂に立ち会わせて二つの *écritures* を接続し、完結させている点にある。
- ***稿者の一連のアプローチは「石」を手がかりに行なわれてきた。「石」の創造も、その選りすぐりの「宝石」、その「名称」も神のじきじきの所業(上掲 p. 5 および註 36)-37) 参照)とし、そこに精神的/宗教的価値を置く西欧の伝統はこの国で意識され紹介されてはいないはずだ。トールキンの想像界はこの「物」なしにはありえない。かつて16世紀ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスをしてこの「鉱物の介入」の有無をもって西欧と東洋の文化的特徴を指摘、短いだが何箇所にもおよぶその記載が思い起こされる。1585年とり纏められた。『ヨーロッパ文化と日本文化』、訳註岡田章雄、岩波書店、1995)。聖職者であるにかかわらず、かれの観察は女性の装身具細部におよび、II, 14 (イヤリング)、II, 17 (腕輪)、II, 18 (ネックレス)、II, 22 (指環)等、さらにXI章で装身ではなく所持に及び、「われわれ(西欧人)は宝石や金、銀の片を宝物とする。」(XI, 9)とあり、だが指摘にとどまる。
- 稿者のこの方向の論考は、①“*Emeraude d’Iseut et le jasper de Tristan*”, in *Romania*, tome CXI (1994), pp. 361-384; ②“*Anel*” et “*Seel*”: de Béroul et du *Lancelot au Roman de Tristan en prose*,” in *Miscellanea Medievalis, Mélanges offerts à Philippe Ménard*, professeur à la Sorbonne, tome II, Paris, 1998, pp. 1203-1212; ③「イゼーのエメラルド」(ベール本本の指輪返還の場面・その一考察)、『早稲田大学・明星大学名誉教授 佐藤輝夫先生卒寿記念論文集』、東京、1993, pp. 137-149; ④上記①②は *Emeraude et Jasper* (『中世フランス文学論文集』(選集)、第一巻(欧文篇(1))、明星大学、平成14年3月刊、457頁(「研究成果刊行費」(「増額分」による)、のうち「トリスタン物語」(散文及び韻文) (① pp. 58-81 所収、② pp. 106-115)

に採録。

本稿は現在刊行中の『中世フランス文学論文集』（選集）、第三巻収録の論文の要約となる。これを①、ほかに②「ガラッドの彫像」、肖像学的研究、③「紅玉」の起源、④「邪の城」『カエサルまでの歴史』との比較研究、⑤アルテュールの夢、⑥『散文』、『聖杯の探索』、『聖杯の物語』（散文）におけるガラッドの品級と最初のミサ、⑦「邪の城」と対異教のモルドレンとアウグスチヌス（現在、同時進行の上記『論文集』、第三巻に収録）⑧本稿冒頭に記載の稿（cf. 上掲註 27）参照）、以上八稿が直接にかかわり①③④⑦⑧は完成稿ないし印刷中（国内および国外）。